

焦点が当たりやすくなるためです。しかし、実態を把握するには、やはり現場を見ること、現物を確認することがM&Aには欠かせません。今回は、過去の二つの失敗事例をもとに、M&Aにおける現場主義・現物主義の重要性について解説します。

## 現場主義・現物主義



一つ目の事例は、売上について不正があったケースです。建設企業は大型自動車の整備業を行っており、ヒアリングでは年間1200台の整備を実施しているとのことでした。訪問した際、工場内にも会社敷地にも、出入りする大型車両を見る

ことはなく、社長に聞く「整備依頼が入っていないときに打ち合わせに来てもらっている」との返答でした。

われわれM&Aアドバイザーとしても事業理解を深めるためには、整備工場が稼働しているところを確認する必要がありますが、社長からは先述の返答のため、作業現場を確認することは困難でした。

建設業の粉飾決算については、二つ目の事例は、建設業の粉飾決算についてです。建設業が行っている事業は人気業種であり、買い手も早期に見つかりました。ただ、問題だったのは買取監査を行うために資料準備に入ろうとしたところ一向に資料が出てこなかったことです。

建設業（関連業種含む）の買取監査において、工事台帳が必要となるのですが、ようやく提出された資料を見ると、進行中の工事費用の計上方法に不備があり、同じく提出を拒まれていた元帳を

確認すると完工後の売上債権についても不正が見つかりました。その企業は民間工事だけでなく官庁工事も請け負っていたため、入札時などに影響が出ることを懸念し粉飾決算を行っていたことを告白され、弊社も支援を終了することとなりました。

現在では両社とも会社はなくなっていますが、共通していることはM&Aを進めるにあたり確認すべきことが先延ばしになっていたことです。M&Aにおいてはこのようなことを先延ばししないよう、財務資料だけでなく、現場・現物を早期に確認することが非常に重要となってきます。

現在では両社とも会社はなくなっていますが、共通していることはM&Aを進めるにあたり確認すべきことが先延ばしになっていたことです。M&Aにおいてはこのようなことを先延ばししないよう、財務資料だけでなく、現場・現物を早期に確認することが非常に重要となってきます。

名南M&A情報開発部金融法人課シニアコンサルタント

小田 一之

◇おだ・かずゆき ハウスメーカー、地銀を経て、2012年に名南経営（現・名南経営コンサルティング）入社。M&A仲介業務に従事するとともに、地域金融機関との連携強化に努める。建設業、不動産業を最も得意としており、M&A仲介業務を通じて、地域企業の技術承継を支援している。